



当館展示室内、常設コーナーの様子 撮影：カロワークス

目次

巻頭コラム「西升子のことども」川崎勝(武蔵野大学客員教授)／展示報告 特別展「観潮楼の逸品——鷗外に愛されたものたち」／開催中の展覧会 コレクション展「生誕110年・没後30年 森類——ペンを執った鷗外の末子」／展示会場から／コラム「掌のなかに明治がある——『森鷗外宛書簡集4(く—こ)編』発刊に寄せて——」出口智之(監修者・東京大学准教授)／ショップ便利／カフェ便利／地域情報／活動報告／2021年度後期開館カレンダー／編集後記

2022年に、鷗外生誕160年・没後100年を迎えます!

西升子のこども

川崎 勝 (武蔵野大学名誉教授)

西升子^{きりこ}は、今年二〇二二年十一月二十七日、没後一〇〇年を迎える。
升子の生き様は、「西升子日記」^①と「西周日記」^②に垣間見られる。「舛子」(周は一貫して「舛子」と記す)の記事、二冊の歌集『磯葉集』、『ももよぐさ』(ともに編者の「小伝」を付す)に知ることができる。

升子は、一八四一年(天保十二)十二月十日、医師石川有節、通子の二女として、江戸築地に生まれ、幼名を「みち」という。四歳(嘉永元年)で母と死別し、一八五四年(嘉永七)二月七日、隣家の大垣藩主戸田采女正家の御小姓見習となり、御奥右筆の勧めで「日記」を付けはじめ、奥方から「鳥次」の名をもらう。一八五九年(安政六)三月二十五日、藩書調所教授手伝並の西周と結婚、升子一九歳、周三二歳。一八六二年(文久二年)六月、周をオランダ留学へ送り出した升子は、翌年、糸魚川藩主松平出雲守の系い姫の守役となり、奥方から「升子」と命名される。

升子と周の間には子供はなく、林洞海の子紳六郎を養子に迎えた。さらに周が京都滞在中に渡辺米との間に儲けた勃平を引き取り育てる。途中勃平が再三の悪行をなし、遂には周が激怒して勘当を言い出したときにも、その始末に「母」として飛び回るさまが、「西周日記」に見える。その上、子供のころから「本読事、三味線、琴、針仕事」に熟し、洋食料理も素人はだしであったといい、兄相沢朧のもとに和歌に親しみ、佐佐木弘綱、信綱に師事、また華道にも精通するなど、多彩な生活を送った。
さて、本誌の読者ために、升子と森林太郎との出会いと途絶、関係修復を見ておこう。

一八七二年(明治五)、一〇歳の森林太郎は、父静男に連れられて上京、西家を訪れ、升子と初めて出会い、一時西の家に居住する。「西升子日記」には、森林太郎のことは全く見られないが、「西周日記」からは、森林太郎と升子との接触がいくつか見られる。
その一は、一八八四年(明治十七)六月十五日「此日森林太郎招アリ、お舛参ル」。ドイツ留学拜命の報告の宴に招かれたもので、周は所用で、升子一人が干住に赴いた。出発前には森林太郎自身が西家を訪れている。

その二は、森林太郎が帰国した一八八八年(明治二十)九月八日、「四時過、石黒忠恵、森林太郎、婦朝、迎に夫婦にて停車場に至り、相見て直二歸る」と、夫婦揃って新橋駅まで出迎えている。さらに十日には「舛子、午後千住森氏を訪ひ、林太郎之歸京を賀し、且赤松と之縁談を申込む、彼方よりの返答を申置く」とある。森林太郎に期待して、西家では、オランダ留学以来の友人赤松則良の娘で、一時養女としていた登志子との縁談を進めていた。この縁談と直後に発覚する「舞姫」とのことについては、周知のことであるからここでは触れる必要はなかるう私の見解は翻刻と誤読「西周日記」の翻刻をめぐって「南山経済研究」第30巻第1号、二〇一五年六月、を参照)。
森林太郎と登志子の離婚以後、西と森林太郎の接点はみられなくなる。ただ、一八九七年(明治三十)一月三十一日の周の死後、紳六郎が林太郎に「西周伝」を依頼したことから考えると、あるいは周の最晩年には修復していたのかもしれない。西周の一周忌に、森林太郎は「西周氏速夜の筵に紅葉館に赴」

(鷗外日記)に記している。「西周伝」は、「明治三十年三月に起稿し、同年十月に竣功」され、「西周伝未定稿」として、近親者に配布された。翌年八月四日に訂正が始められ、十一月に刊行された。訂正開始の四日前には、「西後室来る」とある(同)。

升子は、「三十一年十一月森林太郎君の編纂をこひし昔の君の伝の成れる時」として「まし、世を思ひ浮かべてくりかへし巻かへしても読む夕べかなと詠んだ」。
一方、森林太郎は、升子の古希の宴席で配られた、『磯葉集』に序文を書かせた。
おのれ若かりし日始て都に出でて、西周ぬしの家におりき。神田西小川町なる長屋門ある家の、玄閑と応接所との間の部屋に起臥して、日ごとに本郷沓岐坂なる進文学社といふ学校に行き通ひぬ。かくて月日を経る程に、学問は周ぬしの教導を受けしこと多く、操行は夫人升子の君の訓戒を蒙りぬる事数々なり。当時夫人の善く家を治め深く人を懲み給ふをば、見聞して知れりしかど、その暇に筆硯にさへ親みまさんとは思ひ掛けざりけり。あはれ此磯葉集の中なるみ歌どもよ。……されば



左から升子、周、勃平 撮影年月日不詳

おのれが若かりし日、夫人の徳行をのみ仰ぎまつりて、その文藻を崇みまつるに至らざりしは、夫人のみ心を識りまつること猶浅かりしにこそ。……
一九一〇年(明治四十三)五月二十九日「西升子七十の賀筵に水交社にゆく」と記している。このように、晩年の関係は良好であり、升子への敬慕の情が伺える。

- (1)「西升子日記」(川崎勝解説、『南山経済研究』第14巻第1・2号、一九九九年九月)
- (2)「西周日記明治十五年」十九年(大久保利謙解説、『西周全集』第三巻、宗高書房、一九六六年)、「西周日記明治二十年」二十七年(川崎勝解説、『南山経済研究』14-3、36-1(断続的)、二〇〇二年二月)、「二〇二二年六月」

川崎 勝

1942年東京生れ。専門分野、日本近代史。共編著：『馬場辰猪全集』『植木枝盛集』『福澤諭吉書簡集』(岩波書店)、『津田真道全集』『津田真道研究』(みすず書房)、『馬場辰猪日記と遺稿』(慶應義塾大学出版会)など。現在、新『西周全集』編集委員。

展示報告

特別展

「観潮楼の逸品」

——鷗外に愛されたものたち——

会期…2021年4月3日(土)～9月12日(日)
※4月25日(日)～5月31日(月)臨時休館



写真左2点は「観潮楼を飾ったものたち」、右2点は「鷗外が使ったものたち」。

撮影：カロワークス

文京区では、当館が開館する以前の平成16年に『所蔵資料図録 第2集「手回品・生前記念品・家藏品ほか」鷗外愛用の品々』を発行しました。本展は、鷗外日記や書簡、家族の随筆、記録などをもとに、鷗外が生前所有していた品々について再調査し、その後に収蔵された資料や新事実を加えた上で、当館所蔵の鷗外旧蔵品を一堂に展示する機会となりました。

鷗外旧蔵品は、文具、印章、喫煙具、絵画、書、記念品と、いくつかのカテゴリに分けることができます。本展では、これらを「鷗外が使ったものたち」「観潮楼を飾ったものたち」に分け、それぞれ第一展示室と第二展示室で展示しました。「鷗外が使ったものたち」という視点で文具や印章などを見ることで、そこに付着した墨や朱肉などが大きな意味を持つことに気づかされます。鷗外の言葉を紐解いても、鷗外は自身の持ち物について多くは語っておらず、なにをどのように使用していたのかを正確に知ることはできません。しかし、墨や朱墨などのものの痕跡を辿ることで、それらを使用していた鷗外の姿を想像することができそうです。鷗外と同じ空間、同じ時間を共有したものをとらえて、鷗外の息遣いが聞こえてくるようでした。

この度の調査で新たに判明した事実もありました。魚袋朝延の儀式で着用された装束に吊るす飾り具「をかたどった卦算」について、佐佐木信綱主宰の竹柏会の大会参加者に贈られた記念品であったことが、同会の機関誌「心の花」を調査したことで判明しました。また、鷗外が来客時にのみ使用していたという灰皿については、ドイツのテールウェアブランド・WMF社の協力を得て、1906年の同社のカタログにカードトレイとして掲載されていたものであったことが分かりました。

第二展示室で展開した「観潮楼を飾ったものたち」では、絵画や書、記念品などを一挙に展示しました。ここまで多くの絵画や書を表示する機会はこれまで殆どなく、圧巻の迫力でした。鷗外の家族が、随筆などで観潮楼についての思い出を語るとき、家中に飾られていた絵画や書を基軸として記憶していることが分かります。これらを展示して眺めることで、鷗外や家族が見ていた観潮楼の風景を共有できたように感じられました。ものに触れることはそこに宿る記憶に触れることなのかもしれません。

このように一覽したことで、微かながらも鷗外のものに対する態度が垣間見えたように感じられます。新しいものや金銭的価値の高いものを蒐集することにこだわるのではなく、贈り主や作者との関係性や入手に至った経緯を重視して、一つ一つのものを大切に使用していた鷗外の姿が思い浮かびました。2022年の鷗外生誕160年・没後100年を前に、本展を準備・開催することで、当館の所蔵資料の中でも存在感を放つ鷗外旧蔵品について、再確認することができました。



YouTubeで配信した展示解説動画

展示会期間中に開催を予定していた関連講演会と展示解説は、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令を受け全て中止となりました。しかし、新たに開設した記念館YouTubeチャンネルで、展示解説動画と半田昌之氏講演「鷗外とたばこ」明治の文豪と嗜好品」を配信しました。映像コンテンツの強みは、様々な角度から資料を撮影して紹介できることです。展示解説動画では、その利点を生かした映像づくりをしていますので、是非ご覧くださり(YouTubeについては、7頁でも紹介しています)。

最後になりましたが、こうした落ち着かない日々ながらも、本展の開催を楽しみに足を運んでくださった皆様にも、厚く御礼申し上げます。

●同時開催(7月1日～7月31日)

当館では毎年「鷗外忌(鷗外の命日)」にあたる7月の一ヶ月間、鷗外「遺言書」の原資料を展示しています。鷗外が亡くなる3日前の大正11年7月6日、鷗外が口述する遺言を、親友の賀古鶴所が筆記しました。「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」という一節がよく知られています。死生観という言葉に注目が集まる昨今、メディアにも取り上げられ、多くの方にご覧いただきました。

開催中の展覧会

コレクション展

「生誕110年・没後30年

森類

——ペンを執った鷗外の末子」開幕！



現在開催中のコレクション展では、生誕110年・没後30年を迎えた鷗外の三男・類の生涯と文筆活動を、当館が所蔵する約6400件の森類旧蔵資料から選りすぐって展覧しています。

第一章では「鷗外とボンチコ(注：類の愛称)」、「絵画を学びにフランスへ」など6つのテーマに分けて、類が書き残した日記、書簡を中心に類の生涯を紹介しています。会場には類の80年の生涯をまとめた年譜、家族や交友関係を示した人物相関図もパネル展示していますので、併せてご覧ください。

第二章では当館が所蔵する類の自筆原稿をケースいっぱい展示しています。発表、未発表を問わず、多くの原稿を所蔵していますが、中でも見ごたえのある原稿を選びました。類の丁寧な筆致、繰り返し加筆修正している臨場感、そして類の文体そのものを味わうことができます。

10代から絵画を学び、30代から本格的に文筆活動に取り組んだ類は、生涯を通じて表現を続けてきたと言えるでしょう。現在、類の著書は絶版になっているため、類の作品を読んだことがない方がほとんどかもしません。本展をきっかけに、表現者としての類に注目していただけるとう幸いです。

展示会場から

森類自筆「昭和二十五年日記」

【館蔵】

昭和25年、39歳の類は前年末に出版社を退職し、妻と4人の子供を抱えて経済的に苦しい日々を過ごしていました。日記を紐解くと、家族との慎ましい暮らしを大切にしながら、読書に勤しみ、これまで書き溜めた詩や小説を歌人の斎藤茂吉や會津八一などに見せ、積極的にアドバイスを求めていることが分かります。

4月28日、類は妻・美穂と義母・安宅福美を伴って詩人・佐藤春夫を訪ね、自作の詩4編『夏』『叢の壺』『少女』『死』の講評をしてもらいました。このうち『少女』と『死』は、武者小路実篤主宰の雑誌『向日葵』創刊号(昭和22年1月)に掲載されたもので、初めて公となった類の文学作品です。

鷗外を敬愛していた春夫は、類の詩について「貴方の詩はお父様の血をうけて、地味なロマンチズム」と評価し、沢山創作するよう助言しています。日記に類の感想は特に記されていません。しかし春夫の言葉を丁寧に書き留めていることから、類にとっても嬉しい言葉だったのでしょう。更に春夫は、「文学に才能があると思ひます。晩成のやうに思ひ、きつと面白いものが出来ると思ふので楽しみに待つてゐますから勉強して下さい」と類を励ましています。残念ながら類の詩作は長く続きませんでした。小説、そしてエッセーと活躍の場を少しずつ広げていきました。

類は後に、春夫が「鷗外の末子としてでなくては、(中略)理解のある心のつながりを持って」接してくれていたとエッセーに綴っています(類『万喧嘩引受処』)。この日記に記された春夫の言葉からも、春夫が類とその作品に「心のつながりを持って」接していたことが伝わってきます。

この資料は、コレクション展「生誕110年・没後30年 森類——ペンを執った鷗外の末子」に展示しています。



コラム

掌のなかに明治がある

——『森鷗外宛書簡集4(かこ編)』発刊に寄せて——

標題のとおり、『森鷗外宛書簡集4(かこ編)』をようやくお届けできるはこびとなりました。七月九日の鷗外忌刊行を目標しておりましたが、作業が遅れ、目標に間に合いませんでしたこと、お待ちくださっていた皆様には深くお詫言申上げます。

今回はか行の差出人による書簡集ということで、河井醉茗・河東碧梧桐・北原白秋・木下李太郎や、(郡司)成忠・露伴・延・成友の幸田一族など、毎号ながらビッグネームが多数含まれております。白秋の葉書は全集逸文ですし、こちらは全集に取められている露伴の葉書にも、鷗外宛の通信文の前に、抹消された別の人物宛の通信が記されていたことが判明して驚愕。ほかにも俳優の上山草人、医学者の呉秀三、鷗外とつながりの深い小池正直、政治家の近衛篤麿、「沙羅の木」に曲をつけた作曲家の小松耕輔ら、鷗外をめぐる文化圏の広がり示す書簡ばかりで、本号も目が離せません。

こうした差出人の顔ぶれにかなりがみて、芥川龍之介と近世近代の俳文学に深い造詣を有する伊藤一郎さん、日本漢詩文の研究者で、鷗外についても詳しい合山林太郎さん、近世から近代の芸能史を専門とされる川下俊文さんに加わっていただき、翻刻注釈を進めてまいりました。これまでの号同様、それぞれの解説論考にもぜひご期待ください。

会期 ● 2021年
9月17日(金) — 12月27日(月)
〔会期中の休館日〕10月26日(火)、11月24日(水)
会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室2
開館時間 ● 10時〜18時(最終入館は17時30分)
観覧料 ● 一般300円
(20名以上の団体・240円)
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料
※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット押印入、友の会会員証ご提示で2割引き
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

展示解説

当館2階講座室にて当館学芸員が展示解説を行います。

日時 2021年10月6日(水)、
11月3日(水・祝)、12月1日(水)
いずれも14時〜(30分程度)

定員 先着15名

※申込不要、当日の展示観覧券が必要
です。直接講座室へお越しください
(開場13時30分)。

同時開催

コーナー展示

「於菟、茉莉、杏奴——類の兄妹」
展示期間 9月17日(金)〜12月27日(月)
の開催日

出口智之(監修者・東京大学准教授)

「細木香以」で「芥川氏の所蔵」とされる、香以の父らが相州海浜に遊んだおりの、美麗な紀行絵巻をめぐる新事実とは？ まだ学生だったころ、暑中休暇で故郷鶴岡に帰省していた小池正直が、同窓の鷗外に送った漢文の手紙の内容は？ 島村抱月・松井須磨子の芸術座に對抗し、長い九州・台湾巡業に出た上山草人が、旅先から鷗外に伝えた巡業の様子とは？ 書簡を発端に謎が解き明され、それがさらなる謎を呼ぶ、これこそ資料・注釈研究の醍醐味です。

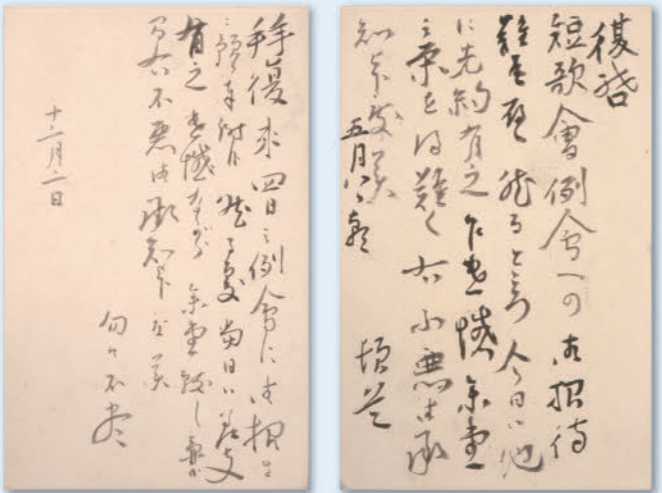
そして、こうした研究に従っているといつも思われるのですが、肉筆資料の翻字はただ無心に楽しい。筆蹟に残る書き手の息づかいを感じながら、彼ら彼女らと鷗外との交流のさまに一字づつふれてゆくのは、まさにわくわくと心躍る瞬間です。今回は書簡の本文面だけでなく、封筒裏裏まで含むすべての影印を掲載でき、またわたしたちの翻字作業の様子も少しだけ記しておきましたので、鷗外が受取った手紙をそのまま肉筆で読むという体験を、ぜひみなさまにも味わっていただければ嬉しく思います。

明治はけつして遠くない。

本シリーズを手にしたみなさまの掌裡から、いまも色あざやかに立ちのぼっているのです。

木下李太郎筆鷗外宛葉書

明治42年5月8日付 [505221] (右)
同年12月2日付 [505222] (左)



書中の「短歌會例会」(5月8日付)、「四日之例会」(12月2日付)は、鷗外が居室・観潮楼で開いていた歌会のことです。明治40年4月から同43年4月にかけておおむね毎月第一土曜日に開催されましたが、全貌は明らかではありません。開催時には、事前に案内状が送られていました。差出人の木下李太郎(1885-1945年、本名・太田正雄は、当時東京帝国大学医科大学の学生で、詩人でもありました。

歌会は東京新詩社の与謝野寛、アララギの伊藤左千夫、竹相会の佐佐木信綱を招きはじめたもので、やがてそれぞれの結社から若手の歌人も参加しました。各々が決められた兼題で短歌を詠み、それらを清書したものが回覧されます。その中から各自が良い短歌を選び、高い点をとった短歌が発表されました。李太郎は初めて参加した同41年10月3日の歌会になぞらえた短歌を詠んだといえます。

李太郎はその後、同42年1から4月の歌会に参加したことが分かっています。李太郎が欠席を知らせた5月8日の歌会は、『鷗外日記』等からは開催が確認できていません。12月4日の歌会は、『鷗外日記』によると佐佐木信綱、平野久保、吉井勇の3名のみが参加しました。紹介した葉書は、『文京区立森鷗外記念館所蔵 森鷗外宛書簡集4』(新刊、詳細は6頁参照)に掲載されています。



ショッピング便り

『森鷗外宛書簡集4』発売中!



定価：3,500円(税別) A5変型判/144頁
監修：出口智之(東京大学准教授)

川上眉山、川島慶治、川尻清潭、河東碧梧桐、北里闌、北原白秋、木下太郎、久保猪之吉、久保田鼎、久保田米斎、熊谷幸之輔、呉文聡、呉秀三、畔柳芥舟、桑木蔵翼、郡司成忠、小池正直、古泉千櫻、幸田成友、幸田延、幸田露伴、國分青厓、小杉天外、小寺菊子、後藤朝太郎、後藤末雄、近衛篤麿、小林愛雄、小松耕輔
*各人の略歴、全書簡の画像を掲載。

○解説(掲載順)

川下俊文(東京大学大学院博士課程)
『上山草人と三枚の葉書』
合山林太郎(慶應義塾大学准教授)
『小池正直の漢文書簡を読む』
『夏休み中の鷗外との交流』
出口智之(東京大学准教授)
『幸田露伴の書簡から』
『注釈余蘊と肉筆資料の愉しみ』
伊藤一郎(東海大学名誉教授)
『鷗外に龍之介が見せた絵巻』

通信販売のご利用方法

購入を希望される場合は、氏名、住所、電話番号、ご希望の商品名、送料を明記の上、当館宛にメール、または電話でご注文ください。確認後、お支払い方法等をご連絡いたします。

※送料はお客様のご負担になります。日本郵便のレターパック370円(ポスト投函)もしくは520円(対面でのお渡し)で発送いたします。どちらかをお選びください(商品によっては宅配便を利用する場合があります)。

☒ bnk-info@moriogai-kinenkan.jp
☎ 03-3824-5511



カフェ便り

モリネセットのひとつ「シユラウフエ」に添えているフルーツブレザーブは、旬の果物など季節に合わせた食材を選んで作っています。7、8月はパイナップルやマンゴーの黄色が鮮やかなトロピカルなブレザーブが登場しました。仕上げに使用したココナッツが、さらに夏らしさを引き出しました。現在はみずみずしい梨を使用したブレザーブをお楽しみいただけます。色付けに入れたグリーンレーズンがアクセントになり、味だけでなく見た目も引き立っています。また、7月より単品でパニライースクリームをご用意しています。
10月からは、昨年に引き続き鳥根県津和野町の食材を使用したメニューが期間限定(10/12月)で始まります。ピクルスやブレザーブ、他にも津和野の名産品をアレンジしたメニューを展開する予定です。短い期間ですが是非お試しください。



雨の日、カフェの窓に広がった景色に見る庭の風景もおすすめです。

地域情報

文京区では、鷗外以外にも様々な文化人が居住したことから、記念年を迎えるゆかりの文化人を年ごとに顕彰する「文の京ゆかりの文化人顕彰事業」を展開し、文京区主催の記念講演会や史跡巡りを開催しています。今年には言語学者・金田一京助を中心とした顕彰事業が展開されます。金田一は、歌人・石川啄木の親友としてもよく知られています。当館が所蔵している3通の啄木筆鷗外宛書簡は、いずれも啄木と金田一が同じ下宿先(文京区内の赤心館、蓋平館別荘)に身を置いていた際に送られたものです。鷗外と金田一との交流は確認できていませんが、文京区内のどこかで二人がすれ違うこともあったかもしれません。
2014年度から作成されている同事業のリーフレットでは、区内の関連企画が紹介されています。当館でもこれまで様々な関連企画を開催してきました。今年誕生110年・没後30年を迎えた鷗外の三男・森類を顕彰対象とし、コレクション展を開催しています(詳細は4頁参照)。



今年度のリーフレット

活動報告

毎年恒例の

七タイムントを開催しました

7月6、7日に七タイムントを行いました。毎年当館前に笹と短冊を用意して、来館者や通りすがりの方が、自由に願い事を書けるようにしています。1日目は天気がすぐれず、館内と人口付近で小規模に行いました。2日目は無事に天気も回復し当館前の大観音通り沿いで行うことができ、今年もたくさんの方々に参加いただきました。親子連れをはじめ、高校生、会社員、買い物婦りの方など様々な方が立ち寄ってください、思い思いに短冊に願いを込めました。なかでも、近隣の学校に通っている中学生受験を控えた小学生数人が、ランドセルを背負って短冊に願い事を書く姿が印象的でした。



鷗外忌、墓前の献花に参加しました

7月9日、森鷗外記念会主催による鷗外忌記念集会在東京三鷹市の禅林寺で行われました。今年には鷗外没後99年目の100回忌にあたります。コロナ禍ということもあり、献花のみの厳かな会でした。午後2時の開式を前に、森家の墓前には様々な方が集まり、葉巻やお酒を供えるなど、それぞれに鷗外を偲ばれていました。朝から降っていた雨が上がり、雲間から差す一直線の陽光の下、真っ白なワイシャツを着た高校

生が鷗外の墓前に献花しました。その凛とした後ろ姿に、100回忌の節目を迎えた当館職員たちは、これから訪れる新しいステージへ背中を押されたような感じがしました。幅広い世代が静かに思いを寄せた鷗外忌。来年2022年はいよいよ鷗外没後100年を迎えます。当館でも記念展示やイベントを企画していきますので、ぜひ一緒に祝いましょう。



SNSで情報発信中!

昨年から続くコロナ禍で、遠方からの来館やイベント開催が難しい状況が続いています。そんな中、少しでも当館の活動をお知らせできるように、SNSなどを使った情報発信に挑戦しています。昨年度はTwitterのアカウントを開設し、より即時性のある情報をお伝えできるようになりました。この6月にはYouTubeチャンネルを開設、第一弾として特別展「観潮楼の逸品」に愛されたものたちの展示解説動画を公開しました。また、開催中止となった展示関連講演会「鷗外とたばこ」明治の文豪と嗜好品」を講師の半田昌之氏ご協力のもと、無観客にて収録、公開しています。今後も少しずつイベント等の配信を行う予定です。是非ご覧ください。



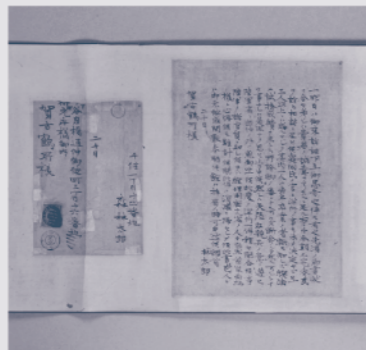
展示関連講演会「鷗外とたばこ」明治の文豪と嗜好品」を講師の半田昌之氏ご協力のもと、無観客にて収録、公開しています。今後も少しずつイベント等の配信を行う予定です。是非ご覧ください。

これまでの保存修復資料を紹介

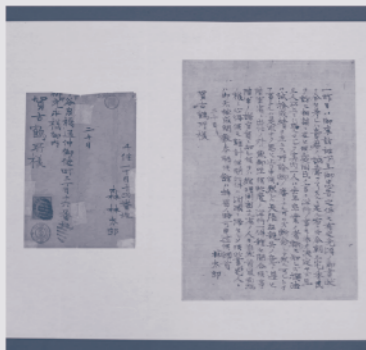
当館では損傷や劣化がみられる資料については、必要な保存修復処置をして資料の保全に努めています。これまでにを行った保存修復処置の一部を報告します。

鷗外筆賀古鶴所宛書簡 明治14年11月20日付 [101030]

鷗外が親友の賀古に陸軍省入省の決意を伝える手紙。卷子装。展覧会にたびたび出品されてきた。鷗外没後に施された表装によって、原資料に負荷がかかり折れやワレが生じ、経年による変色や汚れも目立った。クリーニングを行い、古い裏打紙や過去の補修材を取り除き、新たに薄美濃紙で裏打ち、あらためて卷子装にした。太巻き添え軸を利用して巻き径を大きくし、保管時のストレスを軽減できるようにした。



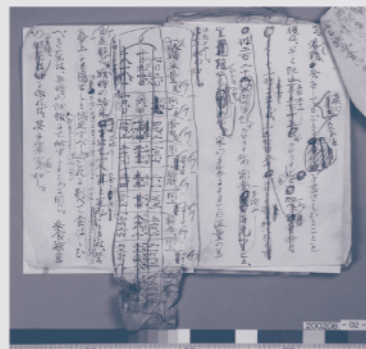
修復前



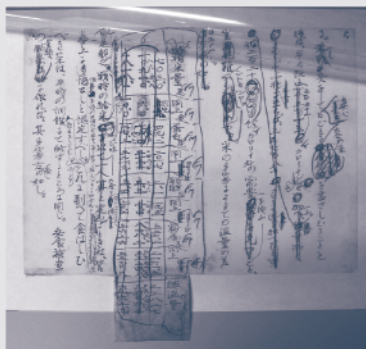
修復後

鷗外自筆原稿 「携帯糧食審査二関スル第一報告」 [200208-01-02]

出兵兵士が非常時のために携帯する食料の基準についての考察。一部他筆あり。二つ折り紙綴り綴じ。罫線紙等に墨書き、校正箇所は水溶性赤インクが使用されている。全体的に折れ皺、ヨレがひどく、部分的に塵埃・虫損・欠損も目立った。クリーニングを行い、損傷部分には補填用紙を設え、フラットニングをし、脱酸性化処理後、アイカイブ保存用のポリエステルフィルムに一枚ずつ封入した。



修復前



修復後

2021年度後期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

10月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 31	25	26	27	28	29	30

11月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

12月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

1月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23 30	24 31	25	26	27	28	29

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

3月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

- コレクション展「生誕110年・没後30年 森類——ペンを執った鷗外の末子」
9月17日(金)～12月27日(月)
- 特別展「写真の中の鷗外(仮称)」
2022年1月9日(日)～4月17日(日)

● 休館日

開館情報は予告なく変更になる場合があります。
詳しくは当館までお問い合わせください。

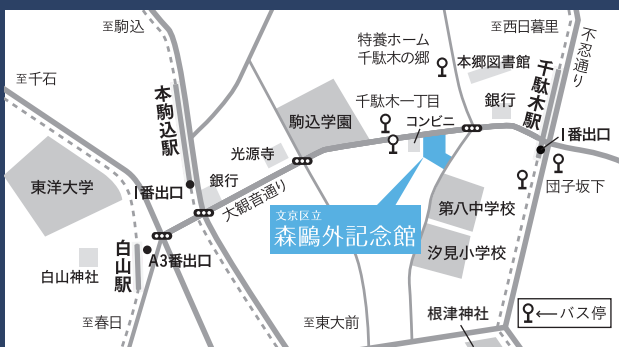
来年2022年は、鷗外生誕160年・没後100年の記念の年です。加えて、当館は開館10年の節目を迎えます。当館では「鷗外100年の森へ」というスローガンを掲げ、様々な記念事業を展開予定です。続報をお楽しみに！

- 調査内容(資料名など)
- 氏名(ふりがな)
- 連絡先(緊急時に連絡がとれるもの)
- 利用時間(時間帯は以下の3枠から1つお選びください)
- ① 10時15分～12時15分
- ② 13時15分～15時15分
- ③ 15時30分～17時30分
- Eメールでお申し込みの場合、当館からの予約確認メールをもって予約完了とさせていただきます。
- ご案内までに時間がかかる場合がありますので、余裕をもって申し込みください。
- ※予約状況によっては、ご希望の日時にご利用いただけない場合があります。
- ※申込は、1通につき1名様(お電話・Eメールどちらかお一人様1通まで)1日1枠に限らせていただきます。

編集後記

芸術の秋、食欲の秋、そして読書の秋。9月に入りいよいよ秋到来です。今回は当館図書室のご利用についてご案内します。図書室は現在、事前予約制にてご利用いただいております。図書室をご利用の方は、希望日の前日18時まで左記項目をEメールまたはお電話でお知らせください。

交通案内



●電車をご利用の場合

- 東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- 東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- 都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- JR線・京成線「目暮里」駅 南口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- 都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - 都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木 1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00 (最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等

